

令和 2 年 5 月 20 日現在

機関番号：10102

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2019

課題番号：18K12408

研究課題名(和文)二重比較構文に関する史的統語研究

研究課題名(英文)A Syntactic Approach to the Development of Double Comparative Constructions

研究代表者

本多 尚子 (HONDA, SHOKO)

北海道教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：40735924

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、二重比較構文を含む各比較構文の発達は、Mustanoja (1960)とKytö and Romaine (1997)により提案された分析を仮定することで理論的に解明できると主張した。特に、二重比較の出現については、英語史において総合的言語から分析的言語への潮流に従って迂言比較の生起頻度が高まっていく中で二重比較構文も周辺のではあるが容認されるようになった可能性が示唆される。また、二重比較構文の消失の要因については、屈折比較と迂言比較との間の機能的分業化の流れと、前述の一方方向性の変化との相互作用であると、コーパス調査結果及び先行研究における分析などを援用し特定した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

二重比較構文を含む比較構文の特徴に基づきデータを細分化したエクセル表のデータベースは今後さらに調査対象を副詞等を含む用例にも広げ、研究のさらなる発展につなげる基盤とすることができるものである。当該研究の成果を他言語の二重比較に関する理論的説明にも活かすことができるか検討した結果、少なくとも黒人英語で二重比較の用例、しかもMustanoja (1960)が英語において指摘したのと同様の特徴を持つ用例が観察されることから、当該言語における言語事実が本研究の成果として得られる分析を用いれば説明可能となり得ることを突き止めた。

研究成果の概要(英文)：This study aims to account for the development of comparative constructions in the history of English, by postulating the syntactic and pragmatic approach proposed by Mustanoja (1960) and Kytö and Romaine (1997).

It is argued that the appearance of double comparatives is peripherally caused by increasing frequency of periphrastic comparatives along with a drift in the history of English from synthetic to analytic language. By using previous studies and the result of my investigation, it is explained that the loss of double comparatives is due to the interactions between the division of pragmatic labor between inflectional comparatives and periphrastic comparatives, and the above drifts.

研究分野：英語学

キーワード：英語史

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 英語史においては、迂言的な句比較を形成する *more* と屈折比較語尾 *-er* が共起する(A)のような比較構文が存在する。当該構文は二重比較と呼ばれ、初期中英語期に出現し、1350年から1450年頃を最盛期として、初期近代英語期までに衰退・消失したとされる。

(A) *Therefore thou arte more harder than ony stone,* (CMMALORY,656.4500: M4)
先行研究においては、当該構文は、総合的言語から分析的言語への流れの中で、英語において屈折比較に加え *more* を用いた迂言的な句比較が導入され始め後者の頻度が増加した結果、両者の間に文法競合が生じ、その決着がつくまでの間両者の特性を併せ持つ二重比較が一時的に許されていたとされている。

しかし、この分析には、迂言的な句比較を形成する頻度が高い形容詞・副詞(3音節以上のもの)と二重比較を作る形容詞・副詞(ほぼ1音節のもの中心)の種類がかなり異なるという点と、二重比較消失後はそこで用いられていた形容詞は屈折比較を用いており、総合的にみると分析的にみがかぶつかった結果前者が残るという英語史の潮流に逆らう例外的現象が起きているという点で疑問が残っている。英語史において、当該構文を除きこうした現象が見られる構文は申請者の知る限りない。

申請者は、この疑問から、そもそも二重比較は屈折比較と迂言的な句比較との文法競合のため生じた構文ではない(総合的言語から分析的言語への流れの中で生じた構文ではない)のではないかと考え、事前調査として、古英語と中英語の史的コーパス調査を行った。

その結果、二重比較の起源の可能性のある新たな構文として(B)を発見した。

(B) *forðæm ic wat þæt ic maran and hefigran wyrðe wære.* (coboeth,Bo:22.50.19.918: OE)

(2) 本研究の核心をなす学術的「問い」は、(i)二重比較の出現及び消失を一般的な文法化や史的变化の仕組みを用いどのように解明できるのかと、(ii)そこからどのような理論的・経験的帰結が得られるのかである。

2. 研究の目的

(1) 二重比較の発達過程に関し、前述の先行研究の問題点を解決し、当該言語事実をより正確に捉えられる史的統語分析を提案する。特に、先行研究とは全く異なる観点から二重比較の出現と消失を捉えることで、二重比較を英語史における潮流(総合的言語 分析的言語)に逆らう例外的構文として扱うのではなく、史的統語論の観点からその発達を十分説明可能と示す。

(2) 二重比較の消失と絡み、屈折比較と迂言的な句比較の双方が、さらに重層化の傾向を強めそれぞれ発展していった言語事実を理論的に説明する。

(3) これまでなされてこなかった二重比較に関する質的・量的に十分な資料に基づく調査を行い、その結果をまとめる。

(4) これまで史的統語論の観点からは説明が困難とされてきた言語事実を、最新の理論的道具立てを援用することで、一般的な文法化や史的变化の枠組みの中で理論的に説明可能と示すことにより、それらに対するさらなる経験的支持を加える。

(5) 二重比較の出現・消失のしくみを理論的に解明することで、なぜ二重比較のような構文が、一部の黒人英語や後期ラテン語、中世フランス語などの様々な言語において存在していたのかを説明する。

(6) 二重比較は人間言語の著しい特徴の1つである「言語の余剰性」を反映する1例であると考えられることから、こうした「言語の余剰性」と関わりの深い言語習得に関しても本研究の成果を還元する。

3. 研究の方法

(1) 本研究では、英語史における二重比較の通時的発達に関し、後述の研究計画に従い、二重比較の出現及び消失を引き起こす統語的メカニズム、二重比較及び関連構文が持つ詳細な統語構造、二重比較の出現及び消失時期の正確な同定と当該変化の要因を解明し、さらにその成果が他言語の同構文に関する言語事実や言語習得研究にどの程度還元可能かも検証した。

平成30年度は、当該年度研究計画に従い、英語史における二重比較の通時的発達を明らかにするため、まず、これまでの予備調査を継続し、4つの史的コーパス *The York-Toronto- Helsinki Parsed Corpus of Old English Prose (YCOE)* (古英語) *The Penn - Helsinki Parsed Corpus of Middle English, Second edition (PPCME2)* (中英語) *The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Early Modern English (PPCEME)* (初期近代英語) *The Penn Parsed Corpus of Modern British English (PPCMBE)* (後期近代英語) 等の歴史コーパス及び文献 (Fukuda (2007)、Kytö and Romaine (1997)、Mustanoja (1960)等) について調査を行い、二重比較の出現・消失時期の正確な同定と、同構文やその関連構文の特徴や出現頻度などを明らかにした。

(2) その後、コーパス及び文献調査の結果を踏まえ、二重比較の出現及び消失を引き起こす統語構造上の変化に関する仮説を設定しその理論的及び経験的な観点からの妥当性を検証することで、二重比較の出現及び消失を引き起こす具体的な統語メカニズムを解明した。

(3) 解明した統語メカニズムに基づき、二重比較及び関連構文はどのような統語構造を持つのかを検討した。その際、既に申請者が所持している当該分野に関する基本的文献に加え、新たに購入した当該分野に関する最新の文献や論文の内容を踏まえ、二重比較及び関連構文の統語構造に関する仮説を、理論的にも経験的にも妥当な形で設定した。

(4) 史的コーパス等を用いて、二重比較の発達に影響を与えうる構文の出現及び消失時期とその構造を正確に同定し、両者の関連性の有無を検証した。その際、それらの構文の生起頻度の変化や当該構文に含まれている形容詞及び副詞の種類、そして各要素の語順がどのような分布を示しているか等についても調査・結果をまとめ、それらの構文が持つより詳細な特徴を明らかにすることができた。

(5) 前述の(1)-(4)から得られた事実を基に、英語史における二重比較の出現及び消失の要因を検証・特定した。具体的には、二重比較及び関連構文との間の比較を通して、共通の特徴の有無を検討し、もしあればその特徴から両構文の出現及び消失の要因を特定していくという手法を用いた。

(6) 平成30年度において、二重比較の特徴及び当該構文の出現・消失の要因、その発達過程を統語構造の変化という形で解明できたため、令和元年度はそこで得られた成果を通言語的研究及び言語習得研究にも還元できるのか否かを検討した。まず、英語における二重比較の発達の動機とメカニズムが、他言語の同構文に関する言語事実も同様に説明可能であるのか否かを先行研究等で挙げられている他言語のデータ等を用いて検証した。

(7) 二重比較の出現・消失に関わる研究成果を、人間言語の著しい特徴の1つである「言語の余剰性」の解明という観点から、言語習得に関する側面で還元できるかどうかを、当該分野の文献及び論文の内容を踏まえ検証した。

4. 研究成果

(1) 英語史的コーパス調査の結果から、二重比較の初出例はM2期のもので、その後E3期において消失するまで存続していたことが明らかとなった。特に、二重比較が出現した時期の英語について統語的観点から見ると、屈折比較だけでなく当該時期の迂言比較や二重比較も1音節形容詞を含む用例が中心であるという特徴が見られる。興味深いことに、現代英語と同様の傾向、すなわち、屈折比較とは1音節形容詞がよく共起し、迂言比較とは3音節以上の形容詞がよく共起するという傾向が生じそしてそれが強まるにつれ、二重比較が衰退し、最終的には消失に至っていることが分かった。これらの事実に基づき、本研究では、二重比較の出現及び消失に関しては、当該構文と共起する形容詞の種類と、屈折比較や迂言比較と共起する形容詞の種類との間の関係とその変化が関連している可能性が高いことを突き止めた。

(2) 前述の英語史的コーパスの調査結果と、Mustanoja (1960)とKytö and Romaine (1997)の研究結果とを組み合わせた結果、二重比較の通時的発達過程を突き止めた。特に、二重比較を英語史における潮流(総合的言語 分析的言語)に逆らう例外的構文として扱うのではなく、史的統語論のより一般的な枠組みからその発達を理論的に十分予測可能となった。さらに二重比較構文だけでなく迂言比較構文についてもその発達過程を解明することができた。特に、初期の迂言比較も現代英語とは異なる特徴を持ち屈折比較に代わる異形の1つとして存在していたに過ぎず、二重比較はそれよりも更に周辺的な異形とされていた可能性を、それを支持する経験的事実と共に指摘した。

解明された発達過程は以下の通りである。まず、二重比較の発達については、その出現は、屈折比較の一部が総合的言語から分析的言語への一方向性の変化に従い迂言比較の用法を発達させていく過渡期において、そうした変化との類推で周辺的に生じたものであり、こうしたメカニズムが利用可能だった背景には屈折比較と迂言比較との間の機能的分業がほとんどなされておらず、迂言比較があくまで屈折比較に対する異形の1つとしてしかみなされていなかったことが関係している可能性を示した。そして、二重比較の衰退・消失については、屈折比較と迂言比較との間の機能的分業化の流れと、前述の一方向性の変化との相互作用の結果であると主張し、E2期以降は、屈折比較と迂言比較との間の機能的分業が進み、それぞれが主に含む形容詞の種類が1音節形容詞 対 3音節以上の形容詞と相補分布をなす形で変化したことで、総合的言語から分析的言語への一方向性の変化が生じにくくなり、それとの類推で生じていた周辺の構文である二重比較も衰退したと指摘した。また、E3期以降は、迂言比較が1音節形容詞を避ける傾

向が一段と強まったことがコーパス調査の結果からも明らかとなり、二重比較級が消失するに至った主な原因と考えられることも示した。迂言比較の出現については、0E 期に英語史を通じ一貫して生起頻度が高いとされる 1 音節形容詞を含む屈折比較の用例の影響を受け、まず 1 音節の形容詞を含む迂言比較の用例が出現した。M1 期になると、1 音節の形容詞を含む用例からの類推により、De Smet (2013) で採用されている言語変化の拡散性に従って 2 音節の形容詞を含む用例も許されるようになった。その後、2 種類の用例は M3 期まで共に増加傾向を示し、その中で 2 音節の形容詞を含む用例についても新たな類推が適用され、M3 期に 3 音節以上の形容詞を含む用例が出現した。その結果、迂言比較は、屈折比較と同様に、1 音節の形容詞、2 音節の形容詞、あるいは 3 音節以上の形容詞を含みうる異形として認識されるようになり、両構文との間の機能的分業のメカニズムが働くようになり、現代英語にも引き継がれている、3 音節以上の形容詞と共起しやすく、1 音節の形容詞と共起しにくいという迂言比較の特徴が出現・確立されるに至った。

(3) 二重比較や迂言比較が持つ統語構造についても明らかにした。まず、二重比較の統語構造は以下の通りである。

Vor loue is [ComP more [Com' [Com -er] [AP [A strang]]]]: þanne drede.

次に、迂言比較の統語構造は以下の通りである。

... a view [CompP [Comp more][AP [A beautiful]]]

(4) 二重比較や迂言比較の史的発達に影響を与えた可能性がある構文として“more and 比較級”構文や“more and 原級”構文の通時的発達との関わりについてもコーパス調査の結果を踏まえクロス集計表を用いた統計分析を用いて検証したが、二重比較の用例数があまりにも少なかったため、統計的有意差を得ることはできず、両者の発達過程を直接関連付けることは困難であると分かった。

(5) 英語史における二重比較の出現については、英語史において総合的言語から分析的言語への潮流に従って迂言比較の生起頻度が高まっていく中で二重比較構文も周辺的ではあるが容認されるようになった可能性が示唆される。また、二重比較構文の消失の要因については、屈折比較と迂言比較との間の機能的分業化の流れと、前述の一方向性の変化との相互作用であると、コーパス調査結果及び先行研究における分析などを援用し特定した。こうした史的变化の要因特定を行うために、各構文の特徴に基づきデータを細分化したエクセル表のデータベースは今後さらに調査対象を副詞等を含む用例にも広げ、研究のさらなる発展につなげる基盤とすることができるものである。

(6) 最終年度に実施した研究の成果としては、当該研究の成果を他言語の二重比較に関する理論的説明にも活かすことができるか検討した結果、少なくとも黒人英語で二重比較の用例、しかも Mustanoja (1960) が英語において指摘したのと同様の特徴を持つ用例が観察されることから、当該言語における言語事実が本研究の成果として得られる分析を用いれば説明可能となり得ることを突き止めた。

(7) 二重比較の出現・消失に関わる研究成果を、人間言語の著しい特徴の 1 つである「言語の余剰性」の解明という観点から、言語習得に関する側面で還元できるかどうかを検証したところ、こうした余剰性が生じる背景には、統語的要因から生じる総合的言語から分析的言語への一方向性の変化と、言語使用と大きく関わる機能的分業との間の関係性が大きく影響している可能性が示された。

(8) これまでの研究の成果を、平成 30 年度において、迂言比較の通時的発達に関する部分の成果を北海道教育大学紀要 69 巻 2 号に論文 (Honda (2019)) として、さらに、令和元年度において、二重比較の通時的発達に関する部分の成果を北海道教育大学紀要 70 巻 2 号に論文 (Honda (2020)) としてそれぞれ発表した。特に、本研究成果を Fukuda (2007) の調査結果・分析と組み合わせることにより、英語における様々な比較構文における通時的発達過程の解明につながる理論的道筋を得ることができた。また、本研究における史的コーパス調査結果をまとめたエクセル表は、比較構文に含まれる形容詞や副詞の音節数等より詳細な情報に基づいた検索が可能なデータベースとして引き続き利用可能な形で作成・整備することができたため、そちらを利用した統計解析を行うための研究基盤の整備にもつながった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 本多 尚子	4. 巻 69
2. 論文標題 迂言比較構文における史的発達に関するコーパス研究	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 北海道教育大学紀要 人文科学・社会科学編	6. 最初と最後の頁 43-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 本多 尚子	4. 巻 70
2. 論文標題 二重比較の通時的発達について	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 北海道教育大学紀要 人文科学・社会科学編	6. 最初と最後の頁 23-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	田中 智之 (TANAKA TOMOYUKI)		